

OMM JAPAN 2021 イベントディレクターレポート

2021年を振り返るにはまだ少し早いような気もするが、今年一年もやはりcovid19による影響で多くの事業者や市民、そして私たちイベント運営者にとっても昨年以上に厳しく、時に虚しさを感じるほどの状況だったことは言うまでもありません。

このような状況においてのイベントの準備は、いつも傍らにある中止という先行きへの恐怖はもちろん、なによりも自分たちがそれまで積み重ねてきた努力や誠意とは一切関係ない「流行と世論」に最終的な開催可否を委ねるほかないという現実に対して生じる、これまで経験したことがない異質な感情と向き合わなければならず、開催に向けてのモチベーションを高く保ち続けることが本当に難しかった一年でした。

それでも運営チームの仲間たちとともに全力で準備を進めてきた今年のイベントを終えて今思うことは、この困難な状況を乗り越えて開催できた経験こそを糧として、来年以降も引き続きこのOMM JAPANイベントのクオリティと、コミュニティを育てていきたいという思いです。そして、そう思わせてくれたのはやはり2日間全力で山と向き合い、笑顔と涙、パワーとエネルギー、揺るぎない命の耀きに満ち溢れていた当日の1200名の参加者の姿でした。

あらためましてOMM JAPAN 2021 MOTOSUKO に参加してくれた全参加者の皆様と、スタッフボランティア・関係者の皆様に心からの感謝の気持ちを、そしてまた来年に向けても全力で取り組む決意表明をもって今年のレポートを綴りたいと思います。

評価・課題・反省

1. 開催地

今回の開催地である山梨県富士河口湖町本栖湖周辺の山域は国立公園域が多く含まれ、なおかつ関東近郊屈指の観光スポットのひとつとしても知られるエリアでした。このようなエリアでの開催には超えなくてはならないハードルも多く、今年も渉外は非常に苦勞の多い年でしたが、そのような状況の中でもすべての使用申請・許可など開催に向けて尽力してくれたOMM JAPAN渉外担当のEXTREMO 我部乱にまずは心から感謝したいと思います。

そして、OMM JAPANのような1000人規模のイベントを、国立公園・国有林を有するこのエリアで開催することを受け入れて頂いた富士河口湖町、身延町、環境省、森林管理署、地元関係者のすべての皆様に心より感謝申し上げます。

また、事前調整に万全を尽くしたつもりでも、残念ながらいくつか至らない点があり、それによって当日地元の方々へストレスをお掛けしてしまった点がありましたことをこの場を持って改めてお詫びいたします。今年のように一部に地元生活圏がコースに含まれる場合については、今後よりいっそう事前の挨拶や調整、当日の対策や配慮を徹底するとともに、今年起こってしまった問題を各チーム間でも共有しながら来年以降の課題としていきたいと思います。

・参加者にとってOMMでの体験を通して自然の深い部分と触れ合うことが、自然に対する関心を深めていくことにつながり、自然環境を守る関心や動きへ繋がると信じています。その意味でも、今年は日本を代表する山である富士山麓の国立公園を含む山域で開催できたこと、美しい本栖湖周辺でのイベントセンター、キャンプサイトを設定できたこと、そして2日目の富士樹海の一部を使ったエリアとコースを組めたことは大きな価値があったのではないかと考えています。

今後もOMM JAPANでは、国立公園であるかないかに関わらず、その地域の豊かな自然や景観にできる限り触れられる機会を大事にしたいと考えています。もちろんその土地に自生する貴重な植生や脆弱な土壌、水源地の保護保全に対して十分配慮することは言うまでもありません。

2. コース

コースについての反省、課題の詳細はコースプランナー小泉のレポートを御覧ください。

DAY 1は過去最強とも思える厳しいアップダウンが連続する日本らしい山岳地形を体力と走力で駆け回らなければならないハードなトレイン、そんな中にもフィールドの各所から時折姿を見せる雄大な富士山や本栖湖を見て、一瞬でも疲れを癒やされた参加者も少なくはなかったのではないのでしょうか。打って変わってDAY 2は富士樹海の微地形を舞台としたコンパスワークやナビゲーションスキルが確実に求められる超テクニカルなコース。どこまでも深く、吸い込まれそうな樹海にその一歩を踏み入れた時の緊張感、樹海の中を彷徨うかのように動き続けた先に見つけたCPや、目標のトレイルに出れた時の安堵感が今もまだ鮮明に心に残る参加者も多いのではないかと思います。

こんなにも2日間で濃淡がはっきりとした開催地は過去8年で初めてでもあり、レースを通して舞台となった山々から日本の自然の深さや、そのような場所で繰り広げられるナビゲーションの奥深さや楽しさを新たに知った参加者も多かったのではないかと思います。

毎回開催地が変わるOMMだからこそ、レースは順位やタイムを争うだけでなく、舞台となる大自然から多くの学びや経験に出会える場であるよう、今後も開催地が持つ特徴や魅力を最大限に引き出せるコースを作っていきたいと思います。

またその裏で1200名の山の冒険を無事に終わらせる為に、今年も大きな役割を果たしてくれた安全管理チームの功績は言うまでもありません。

(安全管理上における報告や課題の詳細は安全管理マネージャーのレポートを御覧ください。)
とくに今年のDAY 1では例年以上に多くの骨折、捻挫等の怪我人が出たことや、フィニッシュクローズ時刻を超えてもまだ約30チームが帰還出来ず、山中でビバークを余儀なくされるチームもあったというこの数年でもっと厳しい状況となりましたが、安全管理チームの適切なフローと対応のおかげで該当する全チームと安全確認を取り、初日の運営を無事に終えることができました。

山の経験値、体力、走力、ナビゲーション、それらのレベルがひとりひとり異なる1200名のチャレンジを、オウンリスクという精神の基とはいえ、実際にイベントとして致命的なミスや事故が起こらないようアンダーコントロールしていくことは、OMM JAPAN運営チームにとってもっとも重要なミッションであると考えています。

今後も安全管理チームの役割は非常に大きく、安全管理マネージャーをはじめとする精鋭チームとともに、またコースプランニングチームとの連携もさらに強化しながらより精度の高いイベント運営を目指していきたいと思えます。

3. イベントセンター

今年のイベントセンターは廃校とその体育館内をイベント会場とする初めての試みでしたが、学校という独特の雰囲気とOMMらしいテイストをうまく融合させた良い空間が作れたのでは無いかなと思います。

厳しい2日間のチャレンジに挑む参加者達にとって、肩の力を抜いてリラックスしながら、レースに向けての高揚感も高められる場として、このイベントセンターの作り込みもまたOMMの重要な要素だと考えています。来年以降もその場の持つ特徴を活かしたOMMらしい会場づくりをしていきたいと思えます。

・土曜日朝のトイレが大渋滞を起こしました。例年のトイレ数と参加者数から適正な仮設トイレの数を割り出したと思っていましたが、実際には過去最大の大渋滞となってしまいました。原因については、仮設トイレがメインだったことや、男女が分けられていなかったこと、トイレの詰まり、その他にもイベントセンター付近の施設等の関係など様々考えられますが、とにかく多くの参加者の皆様にご不便をお掛けしてしまったことをこの場を借りてお詫びいたします。

例年トイレの問題は少なからず起こってしまいますが、今年のような大規模な渋滞という事態を絶対に起こさぬように設営チームと今年の分析と確認を行い、来年に向けて準備していきたいと思えます。

・ここ数年はDAY2のFINISHはそのロケーションや天候に合わせた会場づくりという点で、試行錯誤をしながらプランニングから設営を行ってきましたが、今年も天候が崩れないという予報が確定した時点で廃校の校庭を活かした屋外に会場を作るプランで作り込みを行いました。

2日目のフィニッシュから気持ちのよいグラウンドの草地でレース後の余韻を仲間同士で楽しむ姿や表彰式の盛り上がりまで今年も良い場が作れたと思えます。

4. オーバーナイトキャンプ

・今年は美しい森に囲まれたキャンプ場を全面的に貸し切り、オーバーナイトキャンプサイトを作り込みました。水道や常設トイレなど、すでに設備が整った環境での作り込みだったため大きな問題もなくスムーズに作り込むことができました。

・遅い時間帯に帰還したチームが、テントを張れるスペースをなかなか見つけられず苦労していた一方で、宴会などによるスペースの過剰な専有とみられるの報告が参加者からの声として上がりました。いわゆる宴会と呼ばれるキャンプサイトでの仲間同士の交流は、周りの参加者に対する配慮と節度ある言動の範囲であれば、OMM JAPANイベントのひとつの文化的要素としてポジティブ

ブに捉えています。その度を超えるケースが散見されるようであれば今後は然るべき対応を取らざるをえません。ひとまず来年については2019年大会まで導入していたクワイエットゾーンの再度検討と、スペースの過剰専有についての事前の注意喚起の方法について検討したいと思います。

・今年もトイレは常設と仮設の位置が2箇所に分かれるレイアウトでしたが、昨年会場MAPのみで対応した結果トイレの位置がわかりにくかったという反省を活かし、今年はサインを使った導線誘導に切り替えました。結果としては概ねうまくいきましたが、イベントセンター同様に朝のボリュームゾーンの時間帯に渋滞が発生しまいました。

また年々、女性チームの参加者も増えてきているにもかかわらず、今年は女性専用の仮設トイレの数が少なかったことで多くの方にご迷惑をお掛けしてしまいました。来年以降は女性専用のトイレの数を大幅に増やすことを検討したいと思います。

・救護サイトの位置がわかりにくかったという声がスタッフ・参加者から上がりました。事前のプランニングでは救護サイトはできるだけ暖かな場所が良いと思い、キャンプ場内の室内に設置をしていましたが、結果として参加者にとって位置が分かりにくいという問題となりました。幸いにも今年はFINISHがクローズし運営スタッフがその場を去った後に具合が悪くなったという参加者が出なかったために大きな問題にも発展しませんでした。万が一救護が急がれる場合に救護サイトの位置が分かりにくいということは致命的な問題に発展しかねません。

来年以降は必ずFINISH近く、計測テントの近くに救護テントを設けるようにしたいと思います。

5. マーシャル・スタッフ・ボランティア

まずはじめに、今年もイベントスタッフ・ボランティアとして OMM運営チームに加わってくれたすべての仲間達に心から感謝を贈ります。本当にありがとうございました。

8年目となった今回のイベント運営ですが、OMM JAPANが発足して以来初めて、前年からの大きなチーム編成をすることなく運営を迎えました。結果としてはすべてのセクションにおいてほぼ大きな問題や課題もなく、むしろ現場で偶発的に起こるトラブルに対しても、その場にいるボランティアスタッフひとりひとりがフレキシブルに対応する姿を多く目にする事ができました。要因としては各チームにおいてのリーダーをはじめとする指示系統がほぼ確立したこと、またチームの仲間同士、各チーム間での信頼関係が色濃くなってきたこと、そしてなによりも毎年参加してくれるボランティアスタッフの一人ひとりがOMM JAPAN運営の求めるクオリティを深く理解し主体的に動くまでになったこと、そういった年々積み重ねてきた運営チーム全体の成長が今年のイベントクオリティの随所に反映されたという印象がありました。

来年以降も引き続き関わる全てのスタッフ・ボランティアにとってもチャレンジと成長を感じられるイベント運営とチーム作りに励みたいと思います。

THANK YOU FOR ALL

OMM JAPAN 2021 MOTOSUKOをともに作り上げてくれた仲間感謝を贈ります。

Communications Director Jeff Jensen (株式会社ノマディクス)

渉外マネージャー 我部乱 (有限会社エクストレモ)

Event HeadQuarter 野村治子 (株式会社ノマディクス)

Course Director & Technical Director 小泉成行

安全管理マネージャー 村越真 (NPO 法人 M-nop)、早川秀人

計測・リザルト 福西佑紀

スタート・フィニッシュ 田畑清士、坂野翔哉

設営 TEAM NOMADICS

スタッフ・ボランティアとして参加してくれた皆様

富士河口湖町

身延町

本栖湖スポーツセンター

ALL Competitors OMM JAPAN 2021に参加してくれたすべての皆様

Writing by

OMM JAPAN EventDirector 小峯秀行